

# 古典作品の形容語使用状況についての 考察

——古典対照語い表・分類語彙表を用いて——

武 山 隆 昭

## はじめに

『源氏物語』は「あはれ」の文学、『枕草子』は「をかし」の文学、と称されるが、このことは作品の情調から言えるだけでなく、両語の使用頻度数からも言える。すなわち、『古典対照語い表』<sup>(1)</sup>によると「あはれ」の使用数は源氏 = 944・枕 = 87で、「をかし」は源氏 = 534・枕 = 422である。これを両作品の自立語延べ語数で割ると、「あはれ」は源氏 = 4.78%・枕 = 2.64%、「をかし」は源氏 = 2.57%・枕 = 12.82%となり、圧倒的に枕の「をかし」の使用率が高い。いったい、古典文学の各作品の情調は、人物描写にせよ自然描写にせよ、表現に用いられる形容語<sup>(2)</sup>で決まると言っても過言ではない。文章表現における形容語の重要性を確認しておきたい。

本稿は、形容語を計量的に扱って、採り上げた14古典作品それぞれの表現特徴の一端を明らかにしたいと企図したものである。14作品とは、『古典対照語い表』から万葉集を除いた、竹取物語（竹取）・伊勢物語（伊勢）・古今和歌集（古今）・土左日記（土左）・後撰和歌集（後撰）・蜻蛉日記（蜻蛉）・枕草子（枕）・源氏物語（源氏）・紫式部日記（紫）・更級日記（更級）・大鏡（大鏡）・方丈記（方丈）・徒然草（徒然）の13編に平家物語（平家）を加えたものである。（ ）内は本稿で用いる略称である。平家物語は、稿者共編の『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引（自

(横2)

立語編)』<sup>(3)</sup>に依った。したがって、本文テキストはそれぞれの語彙総索引の依拠したテキストである。公刊されているので『古典対照語い表』の凡例を参照されたい。万葉集を除いたのは、上代に用いられて中古には用いられなくなった語が散見するからである。

本稿では、フロッピー版の古典対照語い表 (MS-DOS テキストファイル) を Excel に読み込んでデータ処理をした。すなわち、品詞欄に「形」「形動」とあるものに加え、接尾辞「さ」「み」「げ」などがついて名詞に成っているものも語基が形容語であることから残し、他の品詞の語を消去した。また、平家は索引作成時に HD に記録してあったデータを古典対照語い表に合併させた。こうして出来上がった基礎データは、異なり語数 1858 語、延べ語数 52638 語から成っている。この基礎データを用いて以下の考察を進める。

## 1. 形容語を多く用いている作品は

表 I は、14 作品それぞれの形容語の割合を示したものである。すなわち、形容語の数をその作品全体の語数で割った数値である。

「延べ語数」では、源氏が 153.9 パーミルで 1 位である。人物の外見・心理などキメ細かな描写をしていると思いつつ読んだ感想が数値で立証された。2 位が枕であることも、鋭い観察眼をもって自然や人事を微細な点まで描ききった作品ゆえ首肯できる。3 位が紫であることも源氏と同じ作者ということで納得できる。4 位が更級であることも、源氏にあこがれた作者の文章らしい。5 位は徒然である。兼好法師は平安朝貴族の文化に憧れていたようで、徒然の随所に王朝趣味を窺うことが出来る。それゆえ枕の方に似て、同じ中世随筆文学と言われながら方丈とは異なる数値になっているのであろう。

平家が最下位であるのは、叙事詩とも言われる軍記物語で、戦の進行描写が中心だからであろう。しかし、「峨峨たり」「散散なり」「赫奕たり」

表 I 古典 14 作品形容語使用度数表

	平家	徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏
作品別形容語延べ語数	4489	1949	225	2303	869	1081	31978
自立語全延べ語数	99408	17112	2527	29212	7243	8737	207792
形容語／全延べ %	45.2	113.9	89.0	78.8	120.0	123.7	153.9
作品別形容語異なり語数	534	367	98	372	221	302	1332
自立語異なり語数	14457	4240	1148	4819	1950	2468	11421
形容語／全異なり %	36.9	86.6	85.4	77.2	113.3	122.4	116.6

枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	計
4605	2430	959	244	711	464	365	52638
32905	22398	11955	3496	10015	6931	5124	464855
139.9	108.5	80.2	69.8	71.0	66.9	71.2	113.2
500	388	138	91	149	157	135	1858
5246	3598	1923	984	1994	1692	1312	23877
95.3	107.8	71.8	92.5	74.7	92.8	102.9	77.8

「無惨なり」のような漢語に「たり」「なり」の付いた形容動詞は平家独特のもので、改めて平安朝仮名文学と中世軍記物語との文体（描写）の違いを数値で実感する。大鏡の数値が低いのも、歴史物語という叙事的性格に依るものであろう。また、土左・伊勢・竹取の数値が比較的低いのは時代的な文体の特徴を示しており、蜻蛉以降の女流作家の描写によって形容語を多く用いる文体が定着していったものと考えられる。後撰・古今は、和歌だけを対象とし、詞書・左注を除いているという事情もあるが、歌一首に形容語を2語以上入れることは無理であろうから、このような数値も納得できる。

### 1-1. 異なり語数だんトツの源氏

「異なり語数」の方をみると、紫の方が源氏よりも%の数値が高くなっ

(横 4)

ている。これは、後半の人物批評に見られるように多くの形容語を用いて的確な人物の特徴描写をしていることから肯かれるが、分母が源氏の21%でしかないことも考慮しなければならない。やはり源氏の異なり形容語数 1332 という数値は、2 位平家 3 位枕の約 2.5 倍であり源氏のボキャブラリーの豊富さを再確認させられる。%では次に更級・蜻蛉といった女流日記が高い数値を示しているのは、自照の文学として自己及び周囲の有りようを形容語を使って描写することが多いからであろう。

反対に、平家・大鏡で%数値が低いのは、事象を客観的に淡々と述べていくといった作品の性質に拠るかと思われる。しかし、分母の大きさも考慮すべきで軽々に判断は出来ない。

「異なり語数」の表から「作品別の異なり語数」に再度注目したい。これは、形容語を何種類使っているかということを語っており、稿者には表現の豊かさのバロメーターと映る。この観点から見ると、平家は 500 と源氏に次ぐ多さを示しており、他の 13 作品に見られない形容語即ち平家だけに出てくる語が 216 種類あることから、豊かな表現を持った作品であると言わねばなるまい。大鏡も、枕・蜻蛉に次ぐ 5 位で、決して貧弱な表現の作品とは言えない。また、土左・方丈の数値が少ないのは作品のボリュームが少ないからで、割合を示す%はそんなに低いとは言えない。古今・後撰の和歌文学が比較的少ない数値なのは、表現が類型化し始めた証拠と言ってよいのだろうか。

## 1-2. 40 語で 50%超

表Ⅱは、14 作品の使用度数計（延べ語数）を多い順に並べ、一定のランキングごとに区切って、その区切りに入る語の使用度数、累計、累計を総延べ語数 52638 で割った%を示したものである。

この表によると、異なり語数 1858 のうち、使用頻度数上位 40 位までで全体の 50.9%を占めている。上位 100 語までで 3 分の 2 を越している。また、上位 500 語で 93.7%を占めているから、残りの使用頻度数下

表Ⅱ 延べ語数計ランキング別割合表

ランキング	延べ語数計	累計	%
1～10	15612	15612	29.7
11～20	5285	20897	39.7
21～30	3337	24234	46.0
31～40	2570	26804	50.9
41～50	2229	29033	55.2
51～60	1827	30860	58.6
61～70	1532	32392	61.5
71～80	1324	33716	64.1
81～90	1241	34957	66.4
91～100	1130	36087	68.6
101～150	4213	40300	76.6
151～200	2710	43010	81.7
201～300	3347	46357	88.1
301～400	1810	48167	91.5
401～500	1167	49334	93.7
1858		52638	

ベスト 40 の語（延べ語数）

①なし (5925)、②あはれなり (1481)、③いみじ (1456)、④いかなり (1283)、⑤をかし (1147)、⑥よし (1111)、⑦おほし (996)、⑧あやし (785)、⑨ことなり (719)、⑩ふかし (709)、⑪ちかし (638)、⑫おなじ (634)、⑬うし (603)、⑭いたし (564)、⑮やすし (564)、⑯かなし (558)、⑰めでたし (504)、⑱はかなし (409)、⑲くちをし (406)、⑳いとほし (405)、

21 位以下：くるし、わかし、にくし、あさまし、うれし、さすがなり、こころぐるし、かやうなり、はづかし、あし、こひし、さまざまなり、つらし、しろし、かしこし、たかし、とし、ひさし、めづらし、おそろし (240)。

位 1358 語で 6.3% しか用いられていないということになる。

少数の使用頻度数の高い形容語が、描写の特徴を表していると言えそうである。

## 2. 使用度数ベスト 30 で比較

1-2 で判明したごとく、その作品の中で頻出する形容語は、その作品の描写・表現を特徴づける語である。このような前提に立ち、作品ごと

(横6)

に使用数の多い形容語を上位から 30 語降順に並べ、それを元にして 1 位から 30 位まで順位をつけた。一例として、源氏の場合を表Ⅲに掲げる。源氏の欄だけ 1 から 30 までびっしり並んでいるが、他作品には空欄があったり、数値が番号順になっていない箇所がある。これは、作品ごとに用例数の降順に 1 位～ 30 位 (同数は同順位) の番号を付けたものを同時に示したことによる。空欄は、31 位以下であることを示す。枕や

表Ⅲ 源氏物語のベスト 30

見出	漢字	語種	品詞	活用	平家	徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土中	古今	伊勢	竹取
なし	無		A	ク	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1
あはれなり	哀		B	ナ	2	7		6	3	9	2	8	3	12	11	5	6	16
いかなり	如何		B	ナ	4	4	10	3	5	5	3	6	2	8	20	6	20	4
いみじ	甚		A	シ		4		2	2	7	4	2	5				17	3
おほし	多		A	ク	3	3	2	8	17	8	5	10	11	22	7		17	4
ことなり	異・殊		B	ナ		9	6			4	6	14	25			19	24	
をかし	招		A	シ		6		16	4	2	7	1	7		29			
よし	良		A	ク	8	2	20	5	13	3	8	4	8		3	27	2	2
あやし	怪		A	シ		17	20	9	22	20	9	10	4	29	14			24
ふかし	深		A	ク	5	9	3		12	15	10		18	6	29	8		16
やすし	安		A	ク	15	17	3			15	11		19					24
いたし	甚・痛		A	ク		24				24	12	19	13		7	27	5	4
うし	憂		A	ク		28		17	17	24	13		17	2		2	13	
ちかし	近		A	ク	10	11	3	11	6	29	14	12	10	9	14	16	24	11
いとほし	可憐		A	シ				26			15							
かなし	悲・愛		A	シ	9				7		16		6	4	7	4	2	4
はかなし	果無		A	ク						11	17		26	9		12	13	
おなじ	同		A	シ	5	12	6	4	17	9	18	15	9	12	2			24
こころぐるし	心苦		A	シ							19							
くちをし	口惜		A	シ		28					20	16			20			16
さすがなり	流石		B	ナ				26	22		21						24	24
くるし	苦		A	シ			20		22		22		15	22	11	12		24
はづかし	恥		A	シ						20	23							24
さまざまなり	様様		B	ナ			20				24							
わかし	若		A	ク		11				24	25	17					9	
うれし	嬉		A	シ							26	21		14	14			4
めでたし	愛甚		A	ク	12	13		7	22	24	27	5						16
あさまし	浅		A	シ		24		12		29	28	29	12					
かやうなり	斯様	コ	B	ナ	11			13	22		28							
なつかし	懐		A	シ							30							

\* 語種の空欄は和語、コは混種語。A は形容詞、B は形容動詞。

蜻蛉など作品ごとにそれぞれ別の表ができるわけである。

表Ⅲで1位の「なし」は用例数3346で、2位の「あはれなり」の944を大きく引き離している。目を横に遣り他作品の順位を見るに、何と「なし」は枕が3位である他は全て1位である。これは、「なし」が形容詞ではあるが「あり」の対義語であり、描写ではなく叙述に関わる語だからこの数値となっていると思われる。従って、他の形容語とは区別して考えるべきであろう。その他の「あはれなり」「いかなり」「おほし」「よし」「ちかし」「おなじ」は、12以上の作品でベスト30以内に入っている形容語で、言わば共通語化しており源氏の特徴を表す語とは言えないのかもしれない。むしろ、「あはれなり」の方丈、「おほし」の古今、「よし」の後撰、「おなじ」の伊勢・古今に少ない理由を考察しなければならないのだが、この章ではより多くの作品に共通して用いられている語の方を問題にすることとする。

表Ⅳは、古典14作品それぞれの使用頻度数ベスト30の語（以下B30と略称する）を、他の13作品のB30と比較し、類似度を数値化したもの

表Ⅳ ベスト30の類似度

	平家	徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取
平家	—	3	3	11	1	8	8	6	6	11	3	13	8	2
徒然	7	—	10	6	7	1	2	2	4	13	9	12	10	5
方丈	1	2	—	11	2	8	6	8	2	7	8	11	11	2
大鏡	9	1	11	—	2	6	2	2	7	12	2	13	9	7
更級	1	9	12	7	—	5	5	7	3	9	1	13	11	3
紫	10	1	13	9	6	—	3	1	3	11	6	11	8	5
源氏	11	2	11	7	5	1	—	5	2	10	8	11	9	2
枕	10	2	12	6	6	1	3	—	6	11	3	13	9	3
蜻蛉	12	2	12	9	4	1	2	5	—	8	5	9	9	5
後撰	8	12	8	13	3	8	5	8	5	—	2	1	4	5
土左	9	11	13	7	2	3	9	3	3	3	—	7	11	1
古今	10	9	10	13	5	8	5	10	4	1	3	—	2	5
伊勢	11	10	13	12	5	3	5	4	5	5	5	2	—	1
竹取	7	3	11	10	3	3	2	7	7	11	1	13	3	—
計	106	67	139	121	51	56	57	68	57	112	56	129	104	46
順位	9	7	13	11	2	3	5	7	5	10	3	12	8	1

(横 8)

である。すなわち、表Ⅲでは、源氏の B30 と同じ語が平家では 12、徒然では 19、方丈では 12、大鏡では 16 (以下略) である。この数値に順位を付けると、1 位は紫の 20、2 位は徒然・蜻蛉・竹取の 19、5 位は更級・枕の 17、7 位が大鏡の 16 (中略)、同数最下位は 11 位の平家・方丈・古今の 12 である。この要領で 14 作品それぞれの統計を取り、共通語数順位を横列に示した。従って、縦に集計すると、合計数値の少ないほど他作品との類似度が高いことになる。

竹取が 46 ポイントで 1 位となった。竹取は、大鏡との類似順位が 7 位である他は全て 5 位以内に入っており、最も普遍性の高い形容語使用をして描写を行っているということになる。成立年代の古い竹取が 1 位という結果は予想外であったが、考えてみるに、平安朝の文学語彙は竹取成立時までにはほぼ出そろっていたことを物語っているのであろう。また、竹取は、多くの話型を取り込んだ変化に富んだ展開を見せており、登場人物も男性は帝・貴公子たち・翁、女性はかぐや姫・うかんるり・姫と幅が広く、それぞれの描写に用いる形容語も多岐に亘っていることが 1 位となった理由であると考ええる。

2 位の更級、同率 3 位の紫・土左、ともにさほど長編とは言えないしかも日記文学が上位を占めていることを、どのように考えたらよいのであろうか。考察の手始めに、3 作品に共通の B30 入り形容語を掲出する。

「なし・あはれなり・をかし・いかなり・ちかし・おもしろし・ふかし・よし・しろし・おなじ・おほし・あやし」の 12 語である。これは、扱った 14 作品それぞれの形容語の使用総延べ語数ベスト 50 の中に全て入っている。しかも、34 位の「しろし」、43 位の「おもしろし」を除く 10 語はベスト 12 に入っている。このことは、更級・紫・土左の 3 作品における使用品度数の高い形容語が、他の作品とも共通性の高い語であることを示していることを物語っている。

しかし、12 語という数は、更級＝紫：17、紫＝土左：17、土左＝更級：



19 と比べ5～7 少ない。これは、紫において「かなし・\*あかし・こひし・くるし・\*とほし・\*ながし・をさなし」が B30 に入っていないこと、同じく土左において「いみじ・うし・\*こし・\*つれづれなり・めでたし」が B30 に入っていないこと、更級だけが B30 に入っていて紫・土左には入っていない語が「ころほし・おそろし・\*くらし・\*ゆかし・#おそろしげなり・\*おほきなり・かやうなり・さすがなり・たかし・\*たのもし・#わづかなり、」とかなりの数になっているからである。しかも、その中で\*#の付いていない語はベスト 50 に入っている。（\*印は 51 位から 100 位、#印は 100 位以下）このことは、作品の独自性を示すバロメーターであるとも言える。

### 3. 『分類語彙表』の意味コードを用いて分析

使用頻度数だけでは、作品ごとの形容語の特質を比較するのに物足りない。そこで、国立国語研究所編『分類語彙表』<sup>(4)</sup>の意味コードを用いてよりきめ細かな分析を試みる。古典文学の語彙に『分類語彙表』の意味コード（以下 MC と略称する）を付して考察する方法論としては既に田島毓堂氏の業績がある<sup>(5)</sup>。すなわち、『分類語彙表』という現代語約三万二千六百語を意味の上から分類して MC を与えたものを、古典語に当てはめて利用しようという試みである。しかし、これは旧版を用いたもので、しかも複合語の構成要素に全て MC を施すという方針（MC1、MC2、MC3 のごとく）<sup>(6)</sup>であったため、後の処理・分析が煩雑になるうらみがあった。

本稿では増補改訂版を用い、MC は 1 語に 1 つという原則を立てた。増補改訂版では収録語数が約九万六千語と多く、ほとんどの古典語に対応する現代語を見つけることが出来るからである。しかし、多義語をも MC を 1 つにするため、やや無理な措置をほどこした。以下に MC 付けの方針を掲げる。

◎ MC コードの付け方基準

- 1) 古典語の意味に対応している現代語がある場合はその語の MC を付ける。例：おそろし=恐ろしい 3.3012 (-01 は省略した、以下同じ)
- 2) 現代語にない古典語は、意味を現代語に訳してその現代語の MC を付ける。例：らうたし=かわいらしい 3.3020
- 3) 複数の意味を持つ古典語は、原義と思われる語義を現代語に訳してその現代語の MC を付ける。例：あはれなり=感慨深い 3.3002 (本来は、用例本文に一々当たり文脈上の意味で MC を付すべきであるが、辞書的基本語義で代表させるという、便宜的措置をとった)
- 4) 名詞などに形容語の付いた複合語は、後部構成要素の MC を付ける。例：残り多し・残り少なし=多し・少なし 3.1910
- 5) 名詞又は動詞に形容語化する接尾辞の付いた語は、形容語を重視する立場から次のように処理した。

～ざまなり = 3.1302 例：うちすてざまなり、わたくしざまなり

～がちなり = 3.1331 例：四位五位がちなり、かへりみがちなり

～やすし、～がたし、～にくし = 3.1346 例：出で易し、靡き易なり、明かし難し、入れにくし

～がほなり、～がま(は)し、～まうし = 3.3030

例：あるじがほなり、ことありがほなり、ものへだてがまし、みだりがはし、こたへまうし

例外：焦られがまし=苛立たしい 3.3013

以上のような基準に従って、1858 語に MC を付けた。MC の昇順に並べ替えを行い、3.10 と 3.11 とを代表して表 V に掲げた。

表 V では、左端から、見出・漢字・MC・語種(空欄は和語、カは漢語、コは混種語)・活用(シはシク活用)・平家物語以右作品名・合計(延べ語数)の順である。見出は五十音順になっている。MC の少数以下 2 桁

のところで区切り、その区分に属する全ての語について作品ごとの小計 (延べ語数) を掲げた。その下欄は、計を作品ごとの総延べ語数で割った数値 (割合) である。少数以下 5 位で四捨五入し少数四位までを掲げた。平家の 3.10 欄の 405 という数値は 40.5% であることを示す。1667 とあるのは 16.67% で 166.7% である。小数点を省くためこの表記とした。表 VI は、表 V に代表して掲げた 3.10・3.11 から 3.57 までの MC 表 (掲出は割愛する) をもとに区分ごとに小計をして作成した。以下、表 VI をもとに考察する。

表 VI は、MC を原則として少数以下 2 位までを基本区分として切った。しかし、所属する語の多いものは、少数以下 3・4 位を参照して区切った。3.13・3.19・3.30・3.50 が該当する。従って、37 の区分となった。

表 VI の項目は、左端に MC と見出を掲出し、所属する異なり語数を (異 = 31) のようにして示した。次欄に語例として主な語を掲げた。(n は「なり」) データは、作品ごとの小計 (延べ語数)・割合 10%  $\{(小計 / 総延べ語数) \times 10\} \cdot 10\%$  で示した割合の高い順位 (1 ~ 37 位)、を示したものである。右端に 14 作品の合計を基に同じ数操作の結果を付した。

### 3-1. 計の欄のベスト 5 を見ると

まず、1 位である「存在」を表す 3.12 に注目する。これは、延べ 5925 語の「なし」のためで、「なし」を除けば 987 となり、順位は 20 位となる。枕だけが 4 位であるのも「なし」= 284 が蜻蛉 = 332 よりも少ない (総数は枕 = 4605、蜻蛉 = 2430) ためである。

2 位の 3.1910-11「量、多少・長短・深浅」では、すべての 14 作品で 2 ~ 4 となっており、叙述の基本語を含んでいると言えよう。個別に見ると、「多し」= 996、「少なし」= 108、「長し」= 192、「短し」= 58、「深し」= 709、「浅し」= 151 の他、「高し」= 253、「遠し」「長し」= 192、「遙かなり」= 155、「些かなり」= 149、「僅かなり」= 93 が目立ったところ。ともに叙述の基本となる語と言えよう。

表V MC 付けの例

見出	漢字	MC 1	種	活	平家	徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	計
いかさまなり	如何様	3.1010	ナ	ナ	10						19								29
いかなり	如何	3.1010	ナ	ナ	98	41	4	90	22	22	698	120	133	26	3	14	5	7	1283
いかやうなり	如何様	3.1010	コ	ナ				2			19	1	3					1	26
かくざまなり	斯様	3.1010	コ	ナ								1							1
かやうなり	斯様	3.1010	コ	ナ	53	8	1	33	6		200	7	3					1	312
ことごとなり	異異	3.1010	ナ	ナ				1	2	2						1		6	
さやうなり	然様	3.1010	コ	ナ	6	6	15	1	1	140	22	5					1	1	198
さやなり	然様	3.1010	コ	ナ						2									2
ありのままなり	有限	3.1030	ナ	ナ		2					7		2						11
8Qこまうなり	虚妄	3.1030	カ	ナ		1													1
さうぬなし	相違無	3.1030	ク	ナ	3														3
しぜんなり	自然	3.1030	ナ	ナ								1							1
しんじちなり	真実	3.1030	カ	ナ							1						1		2
ただありなり	只有	3.1030	ナ	ナ					1	3	1								5
ただし	正	3.1030	シ	ナ		3													3
まことし	真	3.1030	シ	ナ	2	5		3	1		2	2							15
まことなり	実	3.1030	ナ	ナ	1														1
まさし	正	3.1030	シ	ナ	9	3								1		3			16
むねむねし	宗宗	3.1040	シ	ナ							4								4
3.10 真偽	小 計				182	69	5	144	30	26	1098	154	146	27	3	18	7	10	1919
	10%				405	354	222	625	359	241	343	334	601	285	123	253	151	274	365
あなたがちなり	彼方	3.1110	ナ	ナ							1								1
うとうとし	疎疎	3.1110	シ	ナ				1	1	23			1						26
うとし	疎	3.1110	ク	ナ	3	7		2		49	2	1	8			2	2		76
うとまし	疎	3.1110	シ	ナ	1	4		1		1	45	3							55
うとましげなり	疎	3.1110	ナ	ナ							5		1						6

[illegible]

表VI MC 区分別用例表

MC の区分	語例	平家	徒然	方丈	大鏡	更歌	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	計
3.10 異島、こそあど	いかn、かやうn、かくござまん、まことし、	語数 182	69	5	144	30	26	1098	154	146	27	3	18	7	10	1919
	ありのままn、まさし、しんじちn、異事n	10% 405	354	222	625	359	241	343	334	601	285	123	253	151	274	365
異 = 19		順位 8	10	14	5	10	17	10	13	7	7	15	8	19	13	12
3.11 類、関係・因果・異同	疎し、うとまし、徒らn、かひなし、	語数 181	50	7	104	17	10	588	61	61	39	23	17	9	9	1187
	ひとし、まさなし、同じ、まぎらはし	10% 403	257	311	452	203	194	184	132	251	407	943	239	194	247	226
異 = 31		順位 9	16	9	11	15	20	19	21	14	6	4	12	16	14	17
3.12 存在、出沒・必然性	あり顔n、無し、はかなし、あらはn、	語数 748	328	52	243	119	126	3979	330	380	244	35	174	88	66	6912
	しのびやかn、みそかn、せんかたなし	10% 1667	1683	2312	1065	1423	1166	1244	717	1564	2544	1434	2447	1897	1808	1313
異 = 30		順位 1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1
3.13 様相、趣・調子	ふびんn、めでたし、をかし、例ざまn	語数 71	61	0	107	36	67	936	592	56	0	2	1	6	6	1941
	そなた様n、よそはし、よしよし	10% 158	313	0	465	698	620	293	1286	230	0	82	14	129	164	369
異 = 34		順位 19	13	29	10	6	3	14	1	15	30	17	25	21	17	9
3.13 様相、特徴	あぢきなし、あやし、こよなし、けn、	語数 71	73	11	90	23	64	1782	185	155	17	5	19	15	4	2514
	なのめn、めづらし、なげきがちn	10% 158	375	489	391	275	592	557	402	638	177	205	267	323	110	478
異 = 99		順位 19	8	4	14	11	4	7	10	6	12	13	7	11	20	7
3.13 様相、良不良・適不適	悪い、つきづきし、よろし、あらまほし	語数 127	147	3	120	17	60	968	320	89	3	27	8	20	31	1940
	ちゅうげんn、につかはし、横しまn	10% 283	754	133	521	205	555	303	695	366	31	1107	113	431	849	369
異 = 34		順位 12	3	17	8	14	5	13	5	10	23	3	17	8	2	10
3.13 様相、粗密・美醜	いろいろな、さまざまn、優美n、やさし	語数 59	63	2	96	14	59	1063	134	34	6	1	11	5	14	1561
	清げn、見苦し、をこがまし、うるはし	10% 131	323	89	417	167	546	332	291	140	63	41	155	108	384	297
異 = 63		順位 21	12	20	13	16	6	11	15	19	20	15	23	10	24	15
3.13 様相、難易・安危	逢ひ難し、聞きにくし、耐へ難し	語数 179	82	12	55	12	35	1240	72	68	21	9	14	12	24	1835
	むつかし、安し、別れ難し、危ふし	10% 399	421	533	239	144	324	388	156	280	220	369	197	259	658	349
異 = 245		順位 10	5	3	15	17	15	9	18	13	11	10	13	13	5	14
3.14 力	あえかn、かよはし、強し、心づよさ、	語数 70	9	2	10	2	4	175	5	11	0	0	2	0	5	295
	はげし、よはげn、猛n、めめし	10% 156	46	89	43	24	37	55	11	45	0	0	28	0	137	56
異 = 27		順位 20	28	20	25	30	31	29	34	27	30	27	22	33	19	28

3.15作用、変化、反復、優劣	盛n、定め無し、かれがれn、熊となし、 妙n、なだらかなn、外々n、まさま 異 = 23	語数 10% 順位	23 51 27	4 21 26	1 44 28	5 22 35	0 0 28	2 19 34	79 25 32	8 17 34	2 8 30	0 0 27	0 28 33	0 0 28	0 24 33
3.16時間、時機・順序・未来	ひさし、夜深し、あやにくn、にはかn、 繁し、いわけなし、早し、古し、未だし 異 = 47	語数 10% 順位	218 486 7	73 375 8	10 444 6	104 452 11	21 251 12	24 222 18	984 308 12	173 376 12	173 712 3	50 521 5	16 656 6	24 745 5	16 438 8
3.17空間、場所・方向	端近n、こなたざまn、大略ちかn ひたおもてn、よこざまn、縦さまn 異 = 8	語数 10% 順位	2 4 36	7 36 0	7 0 4	1 4 12	1 12 19	2 0 9	28 19 34	9 20 36	3 12 31	0 0 32	0 0 30	0 0 27	0 10 33
3.18形	すぐn、平らかn、なほなほし、 まろらかn、幾n、まだらn、 異 = 15	語数 10% 順位	7 16 33	8 41 29	0 17 29	4 24 30	2 46 29	5 30 34	65 24 34	16 35 28	7 29 34	1 10 28	1 41 20	0 22 30	0 28 34
3.19量、多少・長短・深淺 10-11	おほし、すくなn、けちかし、豊かn、 高し、長し、はるかn、ほどなし、浅し 異 = 87	語数 10% 順位	531 1183 2	181 929 2	39 1733 2	168 729 3	77 921 3	71 657 2	2319 725 3	332 721 3	166 683 4	127 1324 2	32 1311 3	73 1027 4	31 668 3
3.19量、大小・広狭	大きなn、事ごとし、細やかn、広大n 狭し、小さし、太し、淺淺たり 異 = 31	語数 10% 順位	119 265 14	39 200 19	11 489 4	24 104 23	10 120 19	18 167 21	361 113 23	83 80 17	20 82 25	0 0 30	0 14 27	1 172 15	8 219 21
3.19量、速度・軽重・寒暖 13-15	いち速し、口遅し、重し、かるらかn、 暑し、寒げn、ぬるし、ひやかn 異 = 33	語数 10% 順位	58 129 22	32 164 17	3 133 20	31 135 20	4 48 27	9 83 27	282 88 24	67 145 19	31 128 20	17 41 12	1 253 8	18 129 21	6 109 23
3.19量、程度・限度・一般 20-40	いとどし、いみじ、おびたし、甚だし かたはなn、またし、あまねし、無期n 異 = 35	語数 10% 順位	56 125 23	54 277 14	10 444 6	200 591 2	89 730 2	32 296 16	90 885 2	379 823 9	90 370 2	6 63 9	0 0 27	0 237 30	11 351 12
3.30心、感覚・飢渴等 00-03	いざとし、甚・痛し、あさまし、せちな、 あはれn、めざまし、つれづれn、たゆし 異 = 42	語数 10% 順位	227 506 5	77 395 6	7 311 9	136 591 6	61 730 4	43 398 11	1962 614 5	190 413 9	204 840 2	22 451 8	11 408 9	29 625 6	15 411 5
3.30心、快・喜び・恐れ 11-12	あいなし、おもしろし、さうさうし、くちをし、 おどろおどろし、むげn、屈立たし 異 = 73	語数 10% 順位	220 490 6	74 380 7	4 178 15	111 482 9	49 586 8	40 370 13	1371 429 8	204 443 8	80 329 12	22 229 8	15 615 7	7 98 18	16 345 9

3.30 心、安心・悲哀	頼もし、心細し、憂し、さびし、もどかし	語数	271	54	6	50	61	41	2247	154	165	131	20	88	24	14	3326
13-14	歎かし、ものぐるほし、わびし、くるし	10%。	604	277	267	217	702	379	703	334	679	1366	820	1238	517	384	632
	異= 98	順位	4	14	13	17	5	12	4	13	5	2	5	3	30	21	4
3.30 心、好悪・敬意	優ん、うつくし、いとほし、なつかし、	語数	346	68	7	131	53	52	2474	269	114	113	14	95	30	21	3787
20-21	にくし、忝なし、憎し、ゆかし、うつくし	10%。	771	349	311	569	610	481	774	584	469	1178	574	1336	647	575	719
	異= 123	順位	3	11	9	7	7	8	2	6	8	4	8	2	4	6	3
3.30 心、表情・態度	知らず顔n、恥ちがまし、所得顔n、	語数	16	4	0	1	4	5	196	12	6	2	0	0	0	0	246
30	ひがひがし、わららかn、みだれがはし	10%。	36	21	0	4	48	46	61	26	25	21	0	0	0	0	47
	異= 80	順位	29	34	29	36	27	29	28	30	24	27	30	33	28	30	30
3.30 心、信念・努力・恥	ひたぶるn、うしろめたし、傍らいたし、	語数	74	42	4	33	8	39	932	93	27	14	1	7	13	8	1295
40-45 欲望・意志	したり顔n、はづかし、殊更n、漫ろn	10%。	165	215	178	143	96	361	291	202	111	146	41	98	280	219	246
	異= 76	順位	17	17	15	19	21	14	15	16	22	15	20	18	12	15	16
3.30 心、判断・詳細・意味	たいだいし、明らかn、さらn、確かn	語数	129	40	1	51	6	22	637	50	65	22	4	14	7	3	1061
66-90 説・見聞	おぼつかなし、あやなし、しるし、裔し	10%。	281	205	39	221	72	204	199	11	141	229	164	197	151	82	200
	異= 46	順位	13	18	28	16	24	19	18	34	18	8	14	13	19	24	20
3.31 言語、言語活動・評判	うるさし、こちたし、さすがn、舌疾し、	語数	12	7	0	17	6	10	394	35	8	2	3	2	5	4	505
00.42	言少なn、名高し、名だたし	10%。	27	36	0	74	72	93	123	76	33	20	123	28	108	110	96
	異= 20	順位	30	30	29	24	24	25	22	24	28	26	15	22	23	20	24
3.33 生活、文化・福祉・動作	今めかし、尊し、はしたなし、藏めし、	語数	85	39	1	26	8	39	852	67	38	9	1	1	4	4	1174
00.10,20,30,90	ゆゆし、しどけなし、有難し、あわたたし	10%。	189	200	44	113	96	361	267	145	156	94	41	14	86	110	223
	異= 66	順位	16	19	26	21	21	17	19	17	18	20	25	25	20	18	18
3.34 行為、身上・人柄・才能・	あてn、あだn、おいらかn、からがろし	語数	159	134	9	145	21	57	1959	175	86	17	6	18	43	27	2856
10-30 威厳・品行	つまし、おろかn、荒らし、猛し	10%。	354	688	400	630	251	527	613	380	354	177	246	253	957	740	543
	異= 161	順位	11	4	8	4	12	8	6	11	11	12	12	8	2	4	6
3.35 交わり	したし、なれなれし、いどまし、恭し	語数	19	3	0	4	0	3	162	6	1	2	0	1	3	0	204
	むつまし、そむきそむきn、冷淡n	10%。	42	15	0	17	0	28	51	13	4	21	0	14	65	0	39
	異= 14	順位	28	36	29	29	35	33	30	33	35	24	27	25	27	28	31





3位の3.3020-21〔心、好悪・愛憎・敬意・感謝〕では、源氏が2位2474あることが大きく影響している。古今も2位であるが語数が95と影響は少ない。続いて平家が3位346で物語に多く用いられている。他作品も徒然の11位を除いて、8位以内にある。この項の特徴は、異なり語数が123と多いことである。多くの形容語が用いられ変化に富んだ描写がなされる分野であると言えよう。延べ語数の多い順に挙げると、「かなし558、いとほし405、にくし350、こひし289、なつかし222、うつくし187、かたじけなし179、ゆかし135、はかばかし120、らうたげなり109、をし108、ねたし102」が100以上である。何れも古典の基本語彙である。続いて、「うらめし99、らうたし95、うつくしげなり78、うらやまし60、いうなり55」が50以上である。「ひとわらへなり46」となるともう基本語彙とは言えないが、「ひとわらはれなり17」を加えると、世間体を必要以上に気にする古代人の生き方が窺えるようである。

4位は、3.3013-14〔心、安心・悲哀〕である。この項は、後撰・古今という和歌文学が2・3位である。「からし・わびし・苦し・心苦し・心もとなし」といった悲哀語がめだつ。和歌文学には人生の悲しみを歌うことが多いからであろう。散文文学では、平家・源氏が4位、更級・蜻蛉・土左が5位である。物語や日記では心の内面を描くことが多いことの反映である。これに対して、三大随筆文学が12～14位と低い(と言っても全体37から見れば真ん中より上であるが)のは、広く事象全体を採り上げていることによるものと思われる。大鏡にも同じ事が言えよう。

5位は、3.3000-03〔心、感覚・感動・興奮・疲労〕である。蜻蛉が2位であるのは、「あはれなり99、あさまし33、いたし32、つれづれなり18」といった心の動揺を書き記した作品の用語ゆえと納得できる。次が更級の4位であることも同様である。同じ日記文学でも、紫が11位でこの項最下位であるのは、枕(9位)と同様に、自照文学ではなく中宮様の周辺を或る程度客観的に描く記録文学的色彩を有するからであろう。

### 3-2. 計の欄の6から10位

6位は、3.3410-30〔行為、身上・人柄・才能・威厳・品行・活動〕である。3.34を一つとしたので、異なり語数は161もあるが延べ語数は2856である。この項で目立つのは、伊勢の2位である。それぞれの逸話に昔男が登場し簡単な人物紹介と行為とが語られるという叙述の特徴を物語る数値である。次に続くのは、徒然・大鏡・竹取の4位である。ところが、共通する語は「いやし・おろかなり・かしこし・さかし・たけし」だけである。徒然は「やんごとなし14、いやし9、つたなし10、すなほなり6」といった身分や人柄を表す語が上位にある。大鏡は「やんごとなし30、あてなり4、古代なり4、けし4、あらかなり4」と変化に富む。竹取は共通5語の他には「まめなり3、なめげなり1、あながちなり1」が挙げられるのみである。作品の性格が異なれば用語も異なるということの証左か。源氏が6位である。源氏の特徴は異なり語数161のうち何と119語を用いている、すなわちどれか他の作品にあって源氏に無い語は42にすぎない。源氏だけの語で3例以上の語を挙げると「げすげすし・やんごとなげなり・うもれいたし・かたくなしげなり・きすくなり・心弱さ・じほふなり・つつましき・ひききなり・おれおれし・かどかどしき・さかしげなり・かけかけし・好きがまし・あら(荒)まし・をんなし」である。(派生語を別々に扱ってる、念のため)

7位は、3.1331〔様相、特徴〕である。この項に属する語としては、計の順に「あやし785、ことなり719、めづらし241、こよなし216、あぢきなし・めづらかなり87、なのめなり52、け(異)なり43、ことやうなり24、ことざまなり22、ものおもはし19」(続いて14、12、11、10他は一桁)である。使用頻度の差が大きい。次の特徴は、作品間の差が大きいことである。この辺りからは、規模の小さな作品(延べ語数が1000以下)は順位が余り意味をなさないの、割合で比べることとする。表二段目の10%の列を見るに、蜻蛉638、紫592、源氏557が50%を越しているのにたいし、竹取110、平家158、後撰177は20%以下である。女

性の作での使用率が高いかと思えば、枕は 402 であるが更級が 275 であるとは言えない。「あやし」以下の上位 4 語の使用状況でこの項の数値が決まっているようである。ちなみに竹取は 3、1、0、0 で 20 位である。

8 位は、3.3011-12 [心、快・喜び・恐れ・怒り・悔しさ] である。この項に属する語としては、計の順に「くちをし 406、うれし 346、おそろし 240、おもしろし 233、あいなし 128、さうざうし 101、おどろおどろし 96、むげなり 88、くやし 79、すさまじ 63、ものし 40」である。10% 欄では、土左 615、更級 586、竹取 548 に対して、古今 98、方丈 178、後撰 229 と差が大きい。土左には、天候や人情に哀楽している描写が目立つことが反映していると思われる。和歌文学を別とすれば、方丈は隠遁者の目で感情を抑えて淡々と叙している結果の数値かと理解する。

9 位は、3.1302 [様相、趣・調子] である。この項に属する語としては、計の順に「をかし 1147、めでたし 504、をかしげなり 157、ふびんなり 31、装ほし 14」で、他は一桁である。作品別では、128.6% の枕が断然 1 位であるのは、「をかし・をかしげなり・めでたしで」584/592 を占めていることに依る。更級 69.8、紫 62.0、大鏡 46.5、徒然 31.3% と続く。注目すべきは、この項に属する形容語が 0 である作品が、方丈・後撰、1 が古今 (めでたし)、2 が土左 (をかし) と極端に少ないものが存在することである。

10 位は、3.1332 [様相、良不良・適不適] である。この項に属する語としては、計の順に「よし 1111、あし 299、よろし 138、わろし 122、よげなり 45、つきづきし 44、つきなし 39、なかぞらなり 21、につかはし 16」である。「よし」は全ての作品に用いられており、ベスト 10 入りの立役者である。作品別に見ると、土左が 110.7% で 3 位であるのが目立つ。「しし子かほよかりき」の表現が思い浮かぶ。続くのは、竹取 84.9 (2 位)、徒然 75.4 (3 位)、枕 69.5 (5 位)、紫 55.5 (5 位)、大鏡 52.1 (8 位) である。日記・随筆・物語の一部に使用度の高いものが見られる。歌集と方丈以外は 20% 以上となっている。

### 3-3. 計の欄の 11 から 37 位概括

11 位から 37 位までの項から、注目すべき数値 (分布) となっているものを採り上げる。

13 位は 3.1920-40 [量、程度・限度] であるが、作品別でみると、更級 106.4%・大鏡 86.8・枕 82.3 は 2 位である。「いみじ 1456」の数値で決まった感がある。

14 位は 3.1346 [様相、難易・安危] である。この項は「～やすし・～かたし」などの複合語が多いため、異なり語数が 245 と最も多い。多くの語に用例が散らばっていると言える。その中で用例数の多いのは、「やすし 564、かたし 190、むつかし 102、聞きにくし・あやふし 54、忍びがたし 46、忘れがたし 43」である。作品別では、方丈が 53.3% で 3 位であるのは「やすし 7、あやふし 2」が貢献している。

19 位の 3.5010-20 [自然、光・色] で、枕が 52.3% で 7 位になっているのは、「白し 76、あかし 33、黒し 23、暗し 22、あざやかなり・あをし 18」などの語によって、きめ細かな自然描写をしている枕の面目躍如と言うところ。また、「つややかなり 10」は、源氏の 5 を抜いて 1 位である。なお、更級 57.4 が 9 位であるが、「木暗し、仄かなり、黄なり」に特徴が見られる。

26 位の 3.3680 [待遇、待遇・礼など] では、伊勢 34.5% 9 位と古今 25.3% 8 位が目につく。伊勢は「つれなし 8、ねんごろなり 6」、古今は「つれなし 10、つれもなし 6、人頼めなり 2」が代表語である。ちなみに、3.3610 公式・公平は該当語がない。

27 位以下には、作品別に見てもある作品だけが上位に入っていることは無いと言ってよく、下位の項目はほとんど全ての作品に共通して用例が少ないと言える。

### 3-4. MC の少数以下 2 桁単位で比較すると

表Ⅶは、表Ⅴで一部示した「MC 付け表」全体を基に、MC の少数以下

(横 22)

表Ⅶ MC 別語数

見出	異語数	延語数	延の順位
3.10 真偽	19	1919	7
3.11 類	31	1187	9
3.12 存在	30	6912	4
3.13 様相	475	9791	2
3.14 力	27	295	15
3.15 作用	23	126	18
3.16 時間	47	1939	6
3.17 空間	8	53	21
3.18 形	15	113	19
3.19 量	186	7290	3
3.30 心	538	14951	1
3.31 言語	20	505	12
3.33 生活	66	1174	10
3.34 行為	161	2856	5
3.35 交わり	14	204	16
3.36 待遇	36	372	13
3.37 経済	12	77	20
3.50 自然	90	1749	8
3.51 物質	23	342	14
3.52 天地	7	30	22
3.56 身体	10	143	17
3.57 生命	20	610	11
計	1858	52638	

2桁単位で比較するために作成した。

異なり語数・延べ語数ともに「3.30 心」が多く、次が「3.13 様相」である。これは、現代語で作成してある『分類語彙表』の所属語でも同様である。反対に所属語数の少ない「3.17 空間」「3.18 形」「3.52 天地」「3.56 身体」などは、『分類語彙表』でも同じように少ないのである。

当然のことではあるが、古語と現代語との MC の分布にはほとんど差異が無いということが判明した。

## おわりに

『古典対照語い表』から万葉集を除き平家物語を加えた古典文学 14 作品の形容語を採り上げ、それぞれの語の使用頻度数を基に種々の観点から比較を試みた。

2 章のベスト 30 をベスト 50 や 100 に拡大するともっときめ細かな考察が出来るであろう。

3 章の『分類語彙表』の MC を付けての考察は、それぞれの作品の特徴が数値的に立証できるので興味深い。今回はまだ未熟な考察しか出来なかったが、この方法論は今後もっと拡充出来ると思う。次回にはさらに一歩進めることを期したい。

## 注

- (1) 宮島達夫『古典対照語い表』(1969 年 12 月、私家版。1971 年 9 月、笠間書院)
- 宮島達夫他『フロッピー版古典対照語い表』(1989 年 9 月、笠間書院)
- (2) 形容語とは、本稿で便宜上用いた術語で、橋本文法の形容詞及び形容動詞を併せたものをいう。ただし、品詞の認定は(1)に依った。
- (3) 近藤政美・武山隆昭・近藤三佐子『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引 自立語編』(1996 年 2 月、勉誠社) 底本は新日本古典文学大系。

(横 24)

(4) 国立国語研究所『分類語彙表』(1964 年 3 月、秀英出版)

同上『分類語彙表—増補改訂版』(2004 年 1 月、大日本図書)

(5) 田島毓堂『意味コードの付け方—語彙比較研究のために—』(1995 年 3 月、名古屋大学大学院国際開発研究科)

(6) 例えば、「あはれ・しり・がほ・なり」は、 $MC1 = 1.1302$ 、 $MC2 = 2.3060$ 、 $MC3 = 3.1300$ 、 $MC4 = 2.1000$  のように構成要素ごとに MC を施している。